

献 辞

一之瀬正興先生が2011年3月末日をもって、本学教授を定年退職される。それを記念して、本『ヨーロッパ文化研究』第30集を先生に捧げ、私たちの先生に対する敬愛の念のしるしとさせていただく。

先生は、20年間勤務された弘前大学を1987年3月に退任され、同年4月に本学文芸学部にて助教授として着任されて以来、1995年に教授昇任を経て、24年の長きにわたって成城大学に奉職された。

先生のご専門の研究は、17世紀のフランス演劇研究である。17世紀のフランス演劇全体の展望の構築的研究はもとより、とりわけモリエールの喜劇をそのドラマツルギーと諷刺思想の視点から専門的に研究されてこられた。作品論を中心にしながらも、主題論や人物論もおろそかにはされなかった。また、諷刺思想の視点の導入にあたり、その重要な背景をなすフランス・モラリスト文学にも深く傾倒されて、ラ・ブリュイエールに関しても深く考察された。先生の研究視野の幅広さに大いに感心させられた。

当然のことながら、日本演劇学会や西洋比較演劇研究会ではながらく運営委員を務められ、演劇の普及及び演劇研究にご尽力された。

教育においては、先生はフランス文学研究、フランス文学特殊研究を講じられたが、学生のフランス語読解能力を徹底的に鍛え直し、テキストを的確に読めて鋭く分析できる一人前のフランス語フランス文学研究者に仕立てあげるような授業だったと聞く。先生の薫陶を受けた学生の多くが、他大学の有能な専任フランス語教員として、非常勤ながら優秀なフランス語教員として育っている。それは、1971-73年にフランス語教授法のためにフランス政府給費留学生として留学されたときの成果に裏付けられたものだった。こ

れらと平行して、フランス語教育の教科書執筆に、大学評価事業に、日本フランス語教育学会運営に（一年間は幹事長として）、フランス語検定試験実施に、大学が実施するフランス西部カトリック大学でのフランス語の短期語学研修指導に（二度にわたって）力を惜しむことなく、終始フランス語教育にご尽力された。

大学運営においては、ヨーロッパ文化学科主任やヨーロッパ文化専攻主任を初め、入試管理委員、国際交流委員、フランス語教務委員など重要な大学各種委員を多く務められた。いずれの委員の任にあられても、先生はつねに積極的建設的な意見を言い、学生によかれ教員によかれと思う改革を願い続けられ、成城らしい大学づくりに大いに寄与された。このように文芸学部・ヨーロッパ文化学科・ヨーロッパ文化専攻と一心同体である先生が去られることを思うと、不安に搔き立てられる。

先生は、研究であれ教育であれ大学運営であれ、いつもゆったりと構えながらも積極的建設的にかかわれる機会を待ち、必要なときには全身全霊で関わることを惜しまなかった。学生によかれ教員によかれ大学によかれという立場を決して忘れないよき大学人を、この3月にお送りしなければならないのはほんとうに寂しく心もとない。今後は、私と同様の趣味だと思われる晴耕雨読の日々を過ごされますよう、しかし近年はあちこちにバイキンが氾濫しているのでアルコール消毒もお忘れなきよう、そしてときどきは、つつい学生によかれ教員によかれ大学によかれという立場を忘れがちなわれわれをたずねてくださり、ご意見やご批判を賜りますようお願いする次第である。

2011年1月

北山研二